Close up

好きを仕事に ——

あなたは今、自分の仕事に満足していますか？
働くことが単なる義務ではなく、楽しいと思えたり、やりがいを感じたりしているでしょうか。

11月23日は勤労感謝の日。「勤労をたつとび（尊び）、生産を祝い、国民がたがいに感謝しあう」ことと定められています。私たちの生活は、労働なくして成り立つものではありません。美味しいごはんが食べられる、テレビやインターネットで様々なコンテンツを楽しむことができる、観光で日常とは違う喜びを味わうことができる。当たり前のようですが、これらは全て労働や生産から享受されるものです。ただ、それは義務的に行われるだけであれば、世の中に活力は生まれません。皆が笑顔で勤労を尊び、モノやエンターテインメントが生まれることを喜び、労働により生み出す側も享受を受ける側も互いに感謝しあい、そこで世の中に活力が生まれることが何よりも大切ではないでしょうか。

今回のクローズアップでは、「好きを仕事に」することによって活躍する方々を特集。楽しく笑顔で働くことで生まれたものとは——。

AIRSTREAM HUNTER

代表　**宮西秀実** さん

大野井から201号線に向かう道沿いに、突如として現れる流線型の銀色の物体。皆さんはアメリカのキャンピングトレーラー「エアストリーム」をご存じでしょうか？キャンピングカーとしてはもちろんですが、今やカフェ等飲食店や美容室、リタイア後の終の棲家や自分だけの秘密基地（一部屋）として使用されています。ここでエアストリームの輸入販売を行っているのは、宮西秀実さん（46歳）。新品のままだけでなく、50～60年前の車両であっても、それぞれの用途に合わせた宮西流の施しがなされた唯一無二のエアストリームは、全国各地にファンがいます。

トヨタ自動車九州で製造の仕事に従事していた宮西さん。自動車の製造ラインの仕事と言えば、夜勤を含む交代勤務があります。その頃、妻の文さんは外資系化粧品会社のBA（美容部員）として活躍。土日関係なく、行橋から博多まで通勤する日々が続いていました。保育園の送迎も夫婦だけでは難しい状況。祖父母の協力を得ながらも、家庭で子どもたちとゆっくり笑顔で会話をする間もなく、ただただ時間に追われる日々だったと言います。貴重な休日でさえ、「明日、仕事かあ・・・」。時間に追われるあまり、次の日のことを考えると顔色が曇っていたそうです。無理をしてでも働くことが家庭のため、子どものため。本当にそうだろうか？宮西さんの中には疑問が生まれてきました。

「子どものため、家族のためと言い訳をせず、自分の人生を思いっきり楽しもう。自分の幸せを家族は一番に願っているはず。自分が笑顔でいることが、家族の幸せに繋がる！」と、退職を決めたのは40歳の頃。まず、妻の文さんへのプレゼンから始まったそうです。周囲は猛反対だったそうですが、お互い時間に追われながらの生活に同じく疑問を抱えていた文さんは、すんなりOK。

退職後、宮西さんはすぐにマーケティングを学びました。「商売」をするには、必ず知識や手法が必要だと考えたからです。それは、勤めていた会社の「トヨタ方式」の存在がお手本でした。それでも、事業を始める目的は「お金持ちになること」ではなく、「自分の好きなことで生活ができること」と思うと、一気に起業へのハードルが下がったそうです。「自分はコーヒーと旅先で出会ったエアストリームが好き。この好きなものを、このワクワクする気持ちを世の中に伝えたい。」と、好きなことを純粋に楽しみながら作業する風景を配信したInstagramやYouTubeは、徐々に全国や世界に広まっていき、今や「airstream hunter（エアストリームハンター）」のフォロワーはInstagramで1.7万人。同じものを買うならこの人から買いたい！と夢を与える職業となっています。

「好きが仕事に」なった宮西さん。このマインドを伝えたいと、著書『働かない勇気』を出版。自身が大切にしたいもの、皆さんに大切にしてほしいものとして、①時間②情熱と思い③楽しさを挙げています。

家族との時間を大切にしたいと選んだ現在の仕事。何年やっていても、毎回海外からやって来るエアストリームに宮西さん自身感動するそうです。磨けば磨くほど輝きを増すアルミ製のエアストリーム。自分が選んだものや施したものが、お客様の元に届いたときの表情を想像してわくわくする思いや情熱、楽しさが多くの人を惹きつけています。

好きなことを仕事にしたはずが、通勤や仕事に精一杯だった妻の文さん。文さんもまた、自分の好きな仕事をしながら、家族との時間を大切に出来る働き方をするために一念発起。2020年、それまで積み上げてきたヨガとBAとしての経験と知識をかけ合わせ、健康と美をサポートする「lotta yoga house」を開業。

宮西さんの著書
『働かない勇気』
電子書籍サービス
Kindleで読むことができます。

金屋の住宅地に佇むコーヒースタンド。看板にはRoaster's laboのロゴと「焙煎研究所」の文字。ここで珈琲豆の焙煎とコーヒーやスイーツの提供を行うのは、焙煎士の植森俊行さん（44歳）。

みやこ町出身の植森さん夫婦ですが、自宅の建設と妻、優子さんの美容室開業を機に、行橋への移住を決めたそうです。その頃の植森さんは会社員。工事現場の看板やさるガードで有名な株式会社仙台銘板で、商品管理の業務を行っていました。全国に営業所があるため、単身赴任は必須。まだ幼い子どもたちとの時間を大切にしたいと思いながらも、家を建て、妻の優子さんは起業したばかりで、植森さんは安定した会社員として働く必要があったと言います。

契機はコロナ禍。当時、新宮町に5年間単身赴任をしていたそうですが、行橋の自宅に帰宅できるのは週末のみ。行動制限、先が見えない新たなウイルスの脅威に、「この貴重な週末の帰省は愚か、他県への転勤が決まれば家族と自由に会えなくなってしまう・・・。」という不安が募りました。スティホームが叫ばれる中、単身赴任先のマンスリーマンションの一室での楽しみは、フライパンで珈琲豆を煎ることでした。ひとりで子育てをしながら美容室経営に励む優子さんに、何か自分ができることはないか・・・。その頃から、優子さんの美容室「union」で、カラーやパーマの待ち時間に自分の焙煎したコーヒーで、味覚を含む五感をお客様に満たしてもらいたいと考えるようになったそうです。

Roaster's labo 焙煎研究所

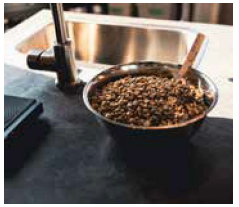
代表　**植森俊行** さん

植森さんはこれまでの人生をこう振り返りました。「これまで、これがやりたい！というような強い意思がなかった。みんなが就職するように、自分も当たり前のように就職した。仕事も指示通りにこなしていた」。そして、さらにこう続けました。「今は、自分の意思を持って働いている。完全独学の珈琲焙煎。豆や気候に合わせながら何千通りもの焙煎を試し、データ管理をしている。また、この豆をどう届けるかマーケティングも学んだ。やっと自分の人生を生きている感覚」。

家族との時間を大切にし、自分が好きな事を仕事にした今、まずはやってみることが大切だと実感しているそうです。人は、年を重ねれば重ねるほど、慎重になってしまいます。何か始めたいという気持ちが少しでもあれば、自信がなくてもチャレンジしてみて欲しいとアドバイスもいただきました。

植森さんは今後の展望について、「博多と言えば明太子、中津と言えば唐揚げ！とみんながすぐに連想するように、『行橋と言えばコーヒー』をめざしたい。文化を作ることは大変だが、作っていかないと生まれない。」と熱い想いをお話ししてくれました。

上：種類ごとにイラストが異なる麻袋。
中：焙煎前の生豆。下：焙煎途中の豆。



今回のクローズアップでは、「好きを仕事に」することで活躍する方々を特集しました。自分の気持ちに正直に、何が一番大切かを考え行動に移すことで、働き方が変わり、笑顔が増える姿が見られました。自分が笑顔になれば、その輪は広がっていきます。家族のみならず、社会全体にも活力が生まれます。

好きなことと言われても、はっきり「これ」と答えることができない人も多いのではないでしょうか。無理に好きなことを見つけたり、仕事にしたりすべきというものではありません。好きだという気持ちを大切にし、我慢したり諦めたりせず前に進んでほしいと思っています。そして、好きなことを仕事にするのか、趣味や息抜きとして大切な時間にするのか、それぞれのライフスタイルや価値観や環境の中で選択してほしいと思います。

年齢や環境は関係ありません。人生は一度きりです。仕事に限らず、何かやってみたいことがあるのになかなかチャレンジできなかった方は、まずやってみる、行動に移すことから始めてみませんか。